

抗日パルチザン参加者たちの回想記

訳 鈴木武

リムガン県エチャグ戦闘(第2巻第11話)

パク・ソンチョル 3

革命のつぼみたち(第4巻第29話)

パク・ヨンスン 15

革命の暴風雨の中で育ち、
勇敢に闘った児童団員たち
(第11巻第16話)

ファン・スニ 26

リムガン県エチャグ戦闘（第2巻第11話）

リ・ヨンスク

エチャグ（別名シナンチャ）戦闘は私が参加した数多くの戦闘の中で最も艱苦だった戦闘のうちの一つである。

これはちょうどハサンホ事件（俗称チャンゴボン事件）で惨敗を喫した日帝が、数十万の兵力を動員して我が抗日パルチザン部隊を〈完全掃蕩〉すると豪語していた時だった。そのため敵の狂暴さは甚だしく、我々の行動は困難だった。

その時の全てのことを今になって細かく思い出すことはできないし、またその時一緒に戦った同志たちの数多くの英雄的偉勳について個々の例を全て挙げることはできない。

ここで話そうと思うエチャグ戦闘でも、ただ私が記憶しているいくつかのことだけを伝えるに過ぎない。

キム・イルソン同志の戦略的方針によって、我が部隊は一九三八年春からチュバン、トンファなどで活動し、一九三八年十月にはリムガンにいた部隊と連合して大部隊で敵の後方を

攪乱し、さらにいっそう大きな打撃を与えるために再びリムガンに帰ってくるようになった。その間に我々は数十、数百度にわたる苛烈な大小の戦闘を進め、それぞれの戦闘で勝利を取めた。そのうちのトンファを中心にしたチュバン県テハング地区における一つの戦闘の実例だけを挙げて、わずか五百名にしかならない我々は、敵の一個連隊（二千余名）を大部分殲滅、捕虜にし、機関銃、歩銃など（千百余丁）をろ獲する勝利を戦取した。このように我々はキム・イルソン同志の作戦計画を成果的に遂行し、日帝侵略者の中国本土に対する侵攻を粉碎するのに大きく寄与したのである。

しかしこのような戦闘の勝利がどれほどの艱難辛苦の中で、どれほどの闘争によってもたらされたことか！

エチャグ戦闘の直前だけでも我々は三十日間も力に余る敵との苛烈な戦いの中で昼夜なく行軍を続けた。敵はおよそ数万名にもなる兵力と飛行隊まで動員して、わずか五百名にしかならない我が軍部隊を（包圍殲滅）する積りだったのである。その上何日も食糧を保障されなかった我が軍部隊の全ての隊員たちと指揮官たちは極度に衰弱していった。実に何重もの敵の中で二重三重の艱難辛苦を克服して進む悪戦苦闘の日々が続いた。

しかしキム・イルソン同志の命令どおりに至るところで多くの敵を撃破粉碎して、再びキム・イルソン同志のおられる主力部隊を訪ねていくようになったので、その喜びと希望は何物にも比べる事ができなかった。

「司令官同志は今度どんな新たな戦闘任務を与えてくださるだろうか。……」

胸いっぱいこみ上げるキム・イルソン同志に対するなつかしさと限りない信頼は、あらゆる艱難辛苦と悪戦苦闘の中で我々を勝利に導いた。

「さあ一歩でも早くキム・イルソン同志のおられるところへ行こう！」

「リムガンまではもういくらもない。いつそ勇敢に戦い抜こう！」

我々はこのように互いに励ましあいながら戦い続け、行軍を続けた。

エチャグ戦闘はまさにこのような行軍過程で、幾重にも張り巡らされた敵の包囲を突破し、キム・イルソン同志に会うための艱難な戦闘だった。

敵は我々がエチャグの谷間に入る前日にすでに飛行隊を動員していた。飛行機からは繰り返し投降せよというビラがまかれた。

敵の飛行機は我々が通過しなければならぬエチャグ一帯の地形を描きながら、十四個連隊もの敵が我々を〈待って〉いるとビラで〈脅し〉をかけた。どっちを見ても敵が幾重にも我々を取り巻きながら現れた。

しかしそれは我々にはそれほど驚くことではなかった。パルチザン闘争それ自体が、すでに広い地域に布置されている敵の中で進められている闘争ではないか！ そうであるならば我々がどうして敵の包囲を恐れようか！ 我々の思いはまさにこのようなものだった。

命令どおりに我々はキム・イルソン同志がおられるリムガンに行かなければならないし、そ

のためにはどのみちエチャグの谷間の敵を撃破しなければならぬという確固とした一念が我々を一丸にした。

苛烈な戦闘が続き、日暮れ頃にやっと我々はエチャグの谷間に入り、一方で戦いながら一方で休息場所を定めるようになった。

エチャグの地形は谷間の真中に低い峰があり、東北方はやや平たい山頂で、東南方は削られたような絶壁が囲んでいた。そしてどこを見渡しても大きな木などはなく、ヨモギの茎とススキばかりだったり、露出した岩石だった。

谷間の真中にある低い峰に機関銃中隊を中心に数十名の歩哨を配置して部隊の全員が休息を始めた。このような時に敵はその付近から一万余名の自衛団と反動、走狗たちをさらに動員して我々を四方からさらに重ねて包囲した。すべて合わせると二、三万名の敵が我々を囲んで幾重にも城を築いた格好だった。

こうした中で一晩が更けていった。敵は夜が明ける前から機関銃を乱射し始め、再び飛行機を動員した。飛行機は空中から我が軍の動向を偵察して地上にいる敵に知らせる一方、射撃を指揮し、直接機銃射撃も浴びせた。同時に敵はだんだん包囲網をさらに狭め始めた。そうしながら「投降せよ！」というビラを引き続きまいた。

この時我が軍は三つの隊伍に分かれ、一部は防御をしながら一部は削られたような東南側の崖を這い登っていた。

敵は崖の上から下へ撃ち、我々は崖の下から上へ撃ちながら崖の上に向かって引き続き一歩一歩這い登った。

このようにして一つの高地を奪うと、また次の高地に敵がいた。その上敵の飛行機は引き続き頭の上を飛び回りながらピラをまき、機銃射撃を浴びせながら爆弾まで投下した。

このような時に、我々の前にある屏風のような岩の上で白旗を振り回す敵が見えた。そいつらは偽満軍だったが、飛行機が自分たちに爆弾を落とすのではないかと思つて合図をしているのだった。

そいつらが立っているところは、我々が這い登っているところからわずか五十〜六十メートルぐらいの崖のでっぱりの上だった。同時に右側の稜線から重機を撃ちながらかかってくるウエノムと、山の下の方から追撃して登ってくるウエノムが必死になつてかかつてきた。

そこで我々は頭の上に偽満軍を置いたまま振り返った。横の稜線から射撃するウエノムと、山の下の方から這い登る奴らに対抗して戦わなければならなかつたからである。

こうなると敵弾は頭上に降り注ぎ、前からも後ろからも、そして右側や左側どこからも雨のように飛んできた。

状況は実に危急だった。指揮部ではしばらく前進を止めて陣地を構築しながら防御戦をして最後の一人まで戦えという命令を下した。

命令どおりに我が軍は猛烈な反撃を加えた。

当時我が第三連隊の連隊長だったバク・ソンボン同志も直接歩銃を取って戦った。彼は歩銃二丁を置いて連絡兵に弾を込めさせながら続けて射撃をしたが、彼の名射撃によって倒れた敵だけでも八十余名にもなった。

このように全部隊の機関銃、歩銃の猛烈な射撃は、しばしの間敵を群れにしてなぎ倒した。

しかし何しろ数量上で勝る敵は倒れながらも引き続きその後が続いてかかってきた。そしていつのまにか偽満軍がいる崖の上からも日帝の奴らが群れになって下りてきた。

それはちょうど我々の真後ろだった。

この時バク・ソンボン連隊長は私に向かって叫んだ。

「二中隊は高地の上の敵を消滅しろ！ 下の方の敵は私がやっつける！」

こうして我々は三度にわたってかかってきた敵を前後左右において猛烈な火を浴びせた。

このように苛烈な戦闘が進められていた時だった。私の横で戦っていた連絡兵キム・イキョントナムが急に叫んだ。

「…中隊長トナム！ 連隊長トナムが犠牲になりました！…」

この言葉を聞くや、私の胸は何か鋭利な刃物で刺されたようだった。私は思わずぱっと立ち上がって、連隊長トナムがいたところを振り返った。しかしその時はすでに犠牲になった連隊長を負ったトナムたちが谷間の下に下りていった後で、日帝の奴らと肉薄戦をしてい

たトムムたちも今では谷間の下に押されていた。そしてすでに連隊長が戦っていた付近にはどれほどになるのか見当さえつかない日帝の奴らが狼の群れのように登っていた。

「あいつらをすっかりやつつけろ！」

私は喉がぐつと詰まるほどこのように叫びながら、這い登る敵に向かって銃を撃った。中隊の戦友たちも一斉に猛烈な火を浴びせた。しばらくこのように戦っていた時だった。

我々のいる向こう側の稜線（中間稜線）から我々に急いで退却せよという合図がきた。そしてその稜線では我々の機関銃手たちが、我々の中隊の前にいる敵を狙っているのがちらつと見えた。

私は隊員たちを連れて溝に急いで飛び下りて、指揮部がある向こう側の稜線に走った。この時我が軍の機関銃手たちが、我々にかかってくる敵に向かって猛烈な火力を集中した。敵はそれこそ麻の茎が倒れるようだった。

日が暮れるや敵はそれ以上かかってこれずに四方で火を焚いた。約五メートル間隔に一つずつ焚いた焚き火の山は、ほとんど二里周辺をぐるっと囲んで火の海を成した。このようにして奴らは我々が脱出できないようにして、何日でも我が軍が投降するのを待つ態勢を取った。

銃声一発聞こえないエチャグの谷間には、四方で奴らの戦壕を掘る音と、人工障害物を作る斧の音と大槌打ちをする音が騒がしかった。そして自分たち同士で続けて合図をやり取り

する音と、巡察隊の奴らが怒鳴る声が絶え間なく聞こえてきた。

このような幾重もの包囲の中を突破しようと思えば決死戦を覚悟しなければならなかった。指揮官たちの会議が召集された。そして会議では次のような問題が提起された。

：我々は再び夜が明けるまでここにすることはできない。我々は今晚のうちに敵の包囲線を突破しなければならぬ。：

我々が生きてリムガンに行けるか行けないかは我々の闘争いかんにかかっている。：

「どの中隊が突撃隊の先鋒になって敵の包囲線を突破して部隊の退路を開拓するか！」

私はこの時思わずさつと前に進み出た。そして近くに敵がいるということさえ忘れてしまったような大きな声で言った。

「我々の中隊にその任務を任せてください！」

いざこのように言ってみると、心の中がすつきりしながらも胸はどきどきした。重い責任感からだった。

この時ほかの指揮員たちも私とほとんど同時に前に進み出て、それぞれ自分の中隊にその任務を任せてくれというのだった。私は気持ち焦った。

しかし暗闇の中で一人一人を探り見ていた指揮官の輝いた視線が私に止まり、「よろしい！第一中隊がこの任務を執行しなさい！」と快く承諾した時、私は推察できないほどの感激で胸が熱くなり、喉がぐつと込み上がった。

部隊ではすぐに突撃班が組織された。

最後の決死戦を覚悟した私は、全ての隊員たち（この時我が中隊の隊員は六十名だった）に背のうにある私品を一切焼却させた。そして歩兵銃には銃剣をつけさせ、弾は六発ずつ（一発は装弾した）込めさせた。この弾を全て撃ってしまえば次の弾を込める暇もないだろうから、そのまま肉薄戦を展開する決心だった。

手榴弾はみな前に差した。私はしきりに興奮する気持ちを抑えながら、（沈着になろう！そして我が部隊の全てのトンムたちが皆無事に脱出できるように、敵の包囲線を必ず突破しよう！）と何度も自分を鼓舞した。同時に隊員たちに我々は決死戦を覚悟しなければならぬことについてと、最後まで沈着かつ勇敢に戦おうということを強調した。すると皆次のような自分たちの決意を表明した。

「我々が死んでも我々の祖国が解放され、我々の後代が新しい社会で自由と幸福を享受できるならば、これ以上願うことはありません。勝利を確信しながら突撃戦に進みます！」

やがて行動を開始せよという合図が下った。

突破口に向かう時に中隊の前には歩銃手二名を立て、その次に機関銃手二名を立ててからほふく前進をした。

前で歩銃の音がすれば全中隊が突撃する積りだった。

我々の後ろにはかの区分隊が続き、指揮部のすぐ後ろで主力部隊が行動した。

我々は引き続き崖を横切りながら、敵の焚き火と焚き火の間を目標にして這い進んだ。このようにしばらく這っていった我々は、とうとう敵の焚き火の近くに至った。焚き火ごとに数十名ずつの敵が銃を持って立って警備をしていた。その中でも我が中隊が進む正面にある焚き火には比較的人员数が多く、将校も数名見えた。(後に分かったことだが、これは敵の第二連隊の指揮部だった) 私はその焚き火を正面から襲撃すれば、その付近にいるほかの焚き火の敵も我々に集中するだろうし、その間に我が軍が脱出できるだろうと考えた。

そこで、焚き火と焚き火の間を抜けようとしていた考えを捨てて、正面から敵の焚き火を襲撃掃蕩することにした。

このような時に敵も我々を発見した。

「誰だ？」

と敵が叫び声を挙げるや否や、我々は一斉に火を浴びせながら続けて押し入った。

正面の敵が火の中にひっくりかえり、左右にいた敵が混乱に陥った時に、我々は敵の軽機二丁をろ獲していっそう猛烈な火を浴びせた。このためその付近にいた敵はかかってくる気を起こせずにおたおたしていたり、あるいは隠れてしまったりした。

この隙に我々は東南方の山頂を占領し、我が軍部隊の退路を援護した。

ところが我々が高地を下りる時に、隊列の後ろについていた指揮部と一部のトンムたちが見えなかった。

この時の気が気でなかった心情は到底忘れられない。

決死的に敵の幾重もの包囲線を突破して部隊の退路を切り開いたのに、指揮部が脱出できなければ我々だけ生き延びてどうしようという思いだった。

私は中隊を引き返させた。

ちょうどその時だった。

平原の方の樹林地帯から耳慣れたラツパの音が聞こえてきた。

それは間違いなく我々の指揮部から聞こえてくる音だった。そして後に分かったことだが、指揮部は敵が我が中隊に集中する隙を利用して、蹴散らされた空間から急いで脱出し、樹林の周辺にいた敵を退けた。そして我々が高地を下りる時には、その高地の後面にいた敵を続けて攻撃することによって我々を援護してくれたのである。そして我々が再び高地に登る瞬間にラツパで合図したのである。

指揮部と基本部隊のトئمムたちに会った我々は、引き続き戦う準備をしながら急いで行軍を始めた。

暗い夜だったので敵は我々を追撃することはできなかった。しかし我々は油断せずさらに行軍速度を速めた。

次の日夜が明けてやると敵の飛行機が再び空に舞い上がって、我が軍の行方を探り出そうと狂ったように飛びまわった。しかしその時にはすでに我が軍は四個の隊伍に分かれて、敵

の追撃を予想しながらリムガン付近の深い樹林の中に入ってからだいぶ経っていたので、奴らは我々を発見することはできなかつた。

その次の日我々はキム・イルソン同志がおられるリムガンの密営地に到着した。

このように我々はエチャグ戦闘を通じて、キム・イルソン同志が領導される抗日パルチザンの不敗性と強大な威力を重ねて示威した。

(2005年8月30日)

革命のつばみたち（第4巻第29話）

パク・ヨンスン

一九三三年度に入ってから日本帝国主義者たちの狂暴はいつそうひどくなつた。

奴等は日に日に高まっていく大衆の革命的氣勢をへし折ろうと至る所に蜘蛛の巣のように警察網を広げ、軍隊を放つてたくさん愛国者とその家族を殺す一方、人民の財産を奪つたり燃やしたりした。

しかし革命大衆は敵の野獸的弾圧と蛮行にも屈することなく、手に武器を取つて百倍千倍の勇氣を持つて至る所で奴等に立ち向かつて戦つた。まさにこのような時に幼い少年たちも自分の父や母を助けて立ち上がった。

彼らは児童団に網羅され、通信連絡、歩哨警戒、ビラ工作、敵情探知のような重要な仕事をした。

今その時期にあつた話の中から一九三三年秋ヨンギル県ウイラング児童団員たちが闘つた話の一こまを書こうと思う。

秋取が終わっていくらも経たない野原にはまだ穀物の束を積んだ山がそのまま広がっていた。すでに日は西の山を越えたが、何人かの子供たちは畑の端で枝豆焼きをしながら誰かを待っていた。

しばらく後に彼らはウアンウグの方から一人の少女が現われるや、ばたばたと駆けて行ってその子を迎えると、すばやく一つのもろこしの束を積んだ山の中に群がって入っていった。その子はこの村の児童団員である十一才になるテスクという少女だった。彼女は今朝地下組織員から通信連絡の任務を引き受けて山に行つてちょうど今帰つて来たところだった。

テスクはトムムたちに山に行く途中で急に警官の奴等と出くわして身体搜索を受けた話をした。

「…それで私は通信が入ったねぎを夢中になつてかみながらあいつらの前に近づいていったのよ…」

「それで!?!」

「それでねぎを口にかんだままあいつらがさせるままに白菜の束をほどいたのよ…間抜けな奴等よ!白菜の間ばかりひっくり返してみるじゃないの。本当の通信のメモは口にかんだねぎの中に入っているのよ…あははは」

「お前、ほんとうにうまいなあ」

「何がうまいもんですか。やたらと冷や汗かいたんだから。」

テスクはわき目も振らずに遊撃隊のおじさんたちのところに走って行った話や、そしてそのおじさんたちに称賛された話をしばらく並べ立てた。

「ところでみんな！ 本当に変わった消息を私は持ってきたのよ。そこのおじさんがね、今年の春にウアンチョンに行ってきたんだけど……」

と言つてテスクはとても自慢そうに話をするのだった。

「おじさんは私にキム・イルソン將軍様がウアンチョンにいる児童団員たちと過ごしている話をしてくれたのよ。將軍様は児童団員たちの宿所を司令部の横に建てさせていつもその子供たちの生活の世話をなさるそうよ。夕方にはたき火のまわりに子供たちを集めて〈フンプ（興夫）伝〉、〈兎伝〉を聞かせてくださったり、おもしろい遊戯も教えてくださったり……その児童たちは服も全く同じものを着て、勉強も本当によくやっているんだって。」

（訳注―フンプ伝とは、意地の悪い兄ノルブと心の優しい弟フンプがいて、フンプは足を折ったツバメを助けてやったお礼にふくべの種をもらって蒔いたが、できたふくべの中から金銀財宝が出てきて大金持ちになった。それを見てノルブはツバメの足を無理やり折って治してやりもらったふくべの種を蒔いたところ、できたふくべからは糞やお化けが出てきたという話。）

児童たちは眉一つ動かさずに静かにテスクの話に耳を傾けていた。

「ああ、僕たちもウアンチョンの子たちのようだったらどんなにいいだろうな。」

「本当に！」

野原はすでに暗闇に覆われていたが、もろこしの束を積んだ山の中ではほかの子供たちと一緒に仲良くひそひそと話すテスクの声が響いた。「おじさんが言うのには將軍様は私たちが闘っていることもよく知っていらっしやるそうよ。」

「それは本当かい？」今まで黙ってばかりいたムンギルが口を挟んだ。

「本当よ。誰々は児童団の言うことをよく聞いて、また誰々はわがままばかり言うということを將軍様はみんな知っていらっしやるんだって……」

テスクはしばらく話を中断すると、真ん丸い目にいっぱい微笑を浮かべながら子供たちを見回してから、このように話すのだった。

「みんな！ 私たちが立派に闘えば將軍様にきつと会うことができるってそのおじさんが言ったのよ。」

澄んだ空には星がきらきらと輝き始めた。そしてどこからか夜の鳥の静かな鳴き声が聞こえてきた。

「ウアンチョンはここからどれくらい遠いの？」とムンギルが誰にもなく低い声で聞いた。するとテスクが答えた。

「…およそ十晩歩いたら行けるでしょう。…」

この日の夜児童団員たちは母親に叱られることも忘れて長い間キム・イルソン將軍についての話で時間を過ごした。

ムンギル少年は黙って何かを考えていた。それからトンムたちの前でこんなことを言った。「ぼくは児童団の言うことをよく聞くから、テスク！おまえ、遊撃隊のおじさんに会ったら、ぼくがわがままだなんて言っちゃいけないぞ！」

その言葉に子供たちはひそひそ笑いをこらえられなかった。しかし次の瞬間すべての子供たちは將軍様に会うために、革命組織が与えた仕事をいっそう立派にやろうという熱意にあふれた。

この日の夕方の集まりがあつてからウィラングの児童団員たちの生活はいっそう活気を帯びていった。彼らの闘争もだんだん色々な方法で進められるようになった。

児童団員たちは通信連絡ばかりでなく、全てのこととて一生懸命遊撃隊のおじさんたちを助けた。目が覚めれば村の壁と土塀、そして電柱には毎日のように新しいビラが貼られていた。そうかと思えば、数日に一度ずつ巡ってくる市の日には市に集まった人たちの中にどこからともなくたくさんのビラが撒かれたり、偽満軍の兵營の歩哨小屋と垣根にもそれが貼られた。兵營の中にも投げ込まれた。

状況がこのようになるや日帝軍警は山からパルチザンが下りてきて活動していると大騒ぎを始めた。ビラは真昼にも偽満軍が集まったところや、行軍していた軍隊が休息している場

所ならば間違ひなく飛んできた。

これはムンギルたち児童団員が石をピラで包んでゴム銃で飛ばしたものだつた。

敵は見えないこの空中から飛んでくる翼の生えたピラの根源を明らかにするために血眼になつて探し回つた。

奴等は通りの隅々に私服警官を派遣して何日も監視を続けた。

そんなある日だつた。こんな事情をよく知らないムンギルたち児童団員数名がまた活動をしに出かけた。

彼らがゴム銃に二度目の石をはめようとした時だつた。ムンギルは思わぬ足音に後ろを振り返つた。

二人の私服警官が一目散に走つてきていた。

ムンギルはすばやく逃げることもできた。しかし彼は左右で見張りをしているテストクとウンナムにまず大声で知らせた逃がしてから、彼らの代わりに自分が警官に捕まつた。

警察署に引つ張つていかれたムンギルは、すぐに取り調べを受け始めた。奴等は児童団組織の秘密を探り出そうとし、彼らの指導者が誰なのかを明らかにしようと思つた。

奴等は十才になるかならないかのこの幼い子をたやすく手なずけることができるとばかり思つた。

ムンギルの前にはおいしそうな食べ物がいっぱい置かれていた。

「さあ、これを食べる。腹が空いたろう？え、これが一番うまさうだぞ。」と言いながら奴等はパラフィン紙に包んだ菓子をムンギルに突き出した。ムンギルは生まれて初めてこんな菓子を見た。

しかしムンギルは奴等が与えるものを食べるということは日帝の奴等に屈服するということだし、児童団員の榮譽を汚すものだと考えた。

「いやだよ。そんなものは食べられないよ。」とムンギルは言った。

「そう言わずに早く食べる！小さい奴は大人が食べると言ったら食べなきゃだめだ。」奴等はしつこく迫った。

「僕はそんな物は食べられないって言ってるんだよ。」

ムンギルの声はしつかりしてきた。奴等はムンギルをなだめる方法ではだめだと断定した。「何だと、こいつめ！食べられないだと。」そいつはムンギルの襟首をつかんだ。そして彼を空中に持ち上げて床に投げつけた。

「ふん、生まれたばかりの小犬は虎の怖さを知らないと言うが、このがき、大きな口を利きやがって。」

奴等は倒れたムンギルを靴で容赦なく蹴った。

ムンギルがやっと目を開けた時には部屋中がぐるぐる回り始めた。

時間が流れていった。：

ムンギルの目の前には数日前にテスクと一緒にキム・イルソン将軍の話を交わした野原の夜のことか思い浮かんだ。

どんなにむつまじく嬉しい夜だったか！

その日からムンギルは一日も早くキム・イルソン将軍に会って、ウアンチョンの児童たちのように幸福に過ごせるようになる将来を夢見ていたのだった。

そしてムンギルは全てのこととそれまでのようにわがままを言わなくなったし、団員たちの意見を尊重し、児童団で与えた任務を忠実に行っていったのだった。

彼はそれこそが自分が立派な児童団員になる道であり、一日も早くキム・イルソン将軍に会える道なのだということを信じてきたのだった。

このような彼の信念は今になっていっそう固くなっていった。

(僕は何も言わないぞ。)

ムンギルはこぶしを握り締めながら心の中で叫んだ。

するとムンギルにはもう怖いものはなくなった。

警察署に捕まえられてくるまで彼はかなり怯えたし、また心の片隅ではお父さん、お母さんが自分のために胸を焦がしているだろうという哀しい思いもしたのである。

警官は倒れたムンギルを再び椅子に引っ張って座らせた。

そしていろいろと懐柔策を使い始めた。

しかしムンギルはこれらの全てにただ沈黙のみで対した。子供だと見くびっていた奴等は頭に血が上つて薪でムンギルを殴った。しかしムンギルは屈しなかった。やけくそになった奴等はどうとう真つ赤に焼けた鉄串でムンギルの背中にあちこち線を引き始めた。

ムンギルの体はいつのまにか綿のようにぐったりして流血が散った。

奴等はすべてが終わったと思つて拷問を止めた。

しかししばらく後にムンギルは拷問台から千斤万斤の力を振り絞つて起き上がった。

明るい光を探して彼の目はゆっくり鉄窓の方を向いた。彼の目には涙の一滴も浮かんでいなかったし、空のように澄んできれいに輝いていた。

ムンギルは今自分がこのように敵と闘っているということをキム・イルソン將軍様はよく知っておられるだろうと信じた。彼にはそれが限りなく嬉しかった。

「將軍様！ 將軍様！」彼は胸が熱くなるのをどうすることもできず、恋しくも会いたかつたその方の名を呼んでみた。

ムンギルの瞳にはかすかな微笑が浮かんだ。

しかしひどい出血で彼の心臓はだんだん鼓動を止めていった。

彼は全ての力を振り絞つて最後に「児童団万歳！」と叫んで清らかな笑みを浮かべたまま静かに息を引き取つた。

ムンギルが犠牲になつたという消息はウイラングの児童団員たちばかりでなく、少しの間

にヨンギル県の全ての児童たちに知られた。

ウィラングの児童たちは彼の死にひどく胸を痛めながら緊急に集会を持った。

彼らは東の空が明ける小川のほとりで赤いネクタイを飛ばしながら、自分たちもムンギルのようにいつそう勇敢に闘うことを互いに固く誓い合った。

その後のある日だった。警官の奴等が区長の家に集まってひとしきり食事をむさぼっている事実をここの児童たちが知るようになった。

児童たちは奴等が村の捜索に出てきたということを探知した。その時この村には地下工作に出てきた遊撃隊のおじさんがいた。

児童たちはこの事実をそのおじさんに知らせる一方、区長の家の庭に立てかけてあった警官の奴等の銃口に砂を詰めた

思ったより早く食事を済ませた奴等は村の入り口に出てきた。その時遊撃隊のおじさんは向こうの山のふもとに逃げていた。

「怪しい奴だ！」警官の一人が叫びながら銃をぶっ放した。

瞬間そいつは爆音と煙に包まれて倒れてしまった。銃身が砂のために爆発してしまったのである。

ほかの奴等はそいつを顧みる暇もなく遊撃隊のおじさんを追撃し続けた。

いくらか行かずにまた一人が同じぎまで倒れてしまった。

このようにして山の下まで行った奴等が引き返してきた時には皆軍服が破れ、血まみれになっていた。

奴等は銃身が破裂した銃を持って呻吟の声を挙げながらあたふたとヨンギルの方へ逃げた。

このようにしてムンギルのトンムたちは遊撃隊のおじさんを救ったばかりでなく、呪わしい警官の奴等に痛快な打撃を与えたのである。

私は大人たちに劣らず革命のために勇敢で聡明に闘ったウィラングの児童たちと彼らの闘争を、限らない尊敬と愛情を持って回想する。

この児童たちの崇高な革命精神は、今日祖国の懐の中で心ゆくまま学び、飛び回っているつぼみたちの幸福な日々とともにますます輝いている。

(2004年8月18日)

革命の暴風雨の中で育ち、勇敢に闘った児童団員たち（第11巻第16話）

ファン・スニ

今日父なる偉大な首領キム・イルソン同志の慈愛深い懐の中で、数千数万の少年団員たちが、朝鮮革命の将来を背負って進む我が党の眞の息子娘として、共產主義建設の後備隊として賢明でりりしく育つ姿を見るたびに、私は抗日武装闘争時期にキム・イルソン將軍の教えに従って革命の暴風雨の中で確固とした共產主義者に、不屈の革命闘士に育ちながら闘ってきた児童団員たちのことを回想する。

我が朝鮮民族が日帝侵略者の刃の脅しに押さえつけられて将来が真つ暗だったあの時期に、人民の熱い念願を抱いて早くから革命の道に立った偉大な首領キム・イルソン同志は、革命活動の初日から、育ちゆく新しい世代を革命家に育てるためにあらゆる心血を傾けてこられた。キム・イルソン同志は初期の革命活動の時期にすでに革命の遠い将来を見通して、〈セナル（新しい日、新時代の意）少年同盟〉、〈反帝青年同盟〉、〈朝鮮共產主義青年同盟〉、〈少年先鋒隊〉、〈少年探検隊〉など革命的な青少年団体を組織し指導され、革命の足跡を移すところごとで青少年たちを革命家に育成された。

十五星霜にわたる栄光に満ちた抗日武装闘争の日々にもキム・イルソン同志は自ら、青少年たちの革命組織である共青と児童団を組織指導され、遊撃根拠地―解放地区に児童団学校を建て、青少年たちに一般知識と軍事知識を教えてください、闘争の炎の中で彼らを革命の闘士に育て上げた。

私はキム・イルソン同志の温かい懐の中で教育育成された児童団員たちの賢明な闘争について、ヨンギル県ウアンウグ遊撃根拠地で児童団支部責任者の任務を引き受けて働いた時に、直接見聞きしたことをたどっていくつかの事実を書いてみようと思う。

一九三三年の夏にあったことである。

革命組織では敵統治区域にあるロトウゴウ警察署の内部を偵探してくることにしているの任務を、児童団員であるキム・ドンチョル少年ともう一人の少年に与えた。組織が彼らに与えた任務は、警察署の中の構造はどのようになっているか、歩哨はどのように立ち、奴らの人員はどれくらいで、武器はどんなものを持っているかを探り出すことだった。

児童団員たちは最初この任務を受けた時、どのようにしたらよいのかよく分からなかった。そこで最初何度か警察署の周辺を歩き回ってはみたが、組織から受けた任務を遂行するすべがなかった。そうかといって組織が与えた任務を断念することはさらにできなかった。

二人はいろいろ考えをめぐらすうちに、良い方法を一つ思いついた。

それはまりを一つ買ってきて、警察署の前に行って遊びながら機会を作って中に入るこ

にしたのだった。

彼らはすぐにまりを一つ買ってきて、互いにまりを取り合つて蹴りながら、警察署の歩哨の前近くまで行つた。正門の歩哨はこつくりこつくり居眠りしていた。

この時に児童団員のキム・ドン Chol 少年がまりをつかむと、周囲を一度探つてから警察署の土城の中にまりを蹴り入れた。彼らはわざとまりを蹴り入れて、探すふりをしながら行つたり来たりした。

居眠りしていた歩哨が、「おまえたちは何だ？ あつちへ行け」と言いながら長いあくびをした。すると片方の児童団員がわざと大声をあげながらまりを探そうとあちこち飛びまわつた。そうするうちに警察署の大門の中にさつと入つた。

そんな時にキム・ドン Chol 少年は、まりがどこに落ちたのかを探るふりをしながら、土城の外に立っている木に上つてのぞきこんだ。

正門の歩哨は彼らが遊ぶのを見て笑うだけで、まりを探しに入つていく片方の少年を止めなかつた。

城内に入ったその少年は、まりを探すふりをしながら、城内の構造と砲台、武器数と人員数を調べて、涙を拭きながら城門の外に出てきた。

彼らは敵の前では互いに僕のほうがうまかつたと言つて争うふりをしながら帰ってきて、組織に偵探した内容を報告した。その後いくらか経たずに遊撃隊がロトウゴウ警察署を攻撃

したが、大きな勝利を収めた。

このように児童隊員たちは奇抜な知恵と勇敢性を發揮して革命の任務を忠実に遂行した。児童団員たちはこのほかにも遊撃隊員たちを助け、敵統治区域に出かけて壁や電柱、市場や敵の歩哨小屋、さらには敵の兵営の中にまでビラをまいた。

そして彼らは昼間には敵〈討伐隊〉の行動の監視もしたし、組織員たちが会議をする時には歩哨にも立った。

ある日ウアンウグにある学校の庭で二人の児童団員が子供たちと一緒に遊びながら奴らを監視していた。ところがこの時学校の前に日帝の〈討伐隊〉の奴らが大勢登ってきていた。生徒たちは皆目を丸くしてそちらを眺めながら、自分たちの村に行くのではないかと思つて心配していた。

〈討伐隊〉の奴らが行く様子を見ると、チャンラクトンのほうに登っていくのに違いなかった。この日ウアンウグのチャンラクトンの組織員たちは、ポンナムの家で会議をしていた。これを知っている人間はポンナムともう一人の児童団員の二人しかいなかった。

ところがどのように臭いをかぎつけたのか、そこへ〈討伐隊〉の奴らが駆けていくのだった。走狗が密告したのに違いなかった。

(奴らがあつちへ登つていったらたくさんの組織員が捕まるだろう……)
このように考えた。ポンナムの胸は張り裂けそうだった。

もう一人の児童団員がポンナム少年を見た。

彼はポンナム少年に何か言おうとして止めた。こんな時にもしもどちらかが先に走っていつて知らせることになつたら、ほかの生徒たちが気づくかもしれない。それで急ではあつたが互いに黙つてあれこれ考えをめぐらすうちに、ポンナム少年はもう一人の児童団員である自分の仲間を見て、「おい、おまえ、最近力が強くなつただらう。どれ、一度相撲をやつてみようか？」と言いながら飛びかかつた。

その仲間は相撲をするといつもポンナム少年に負けていた。それで彼はポンナム少年と相撲をするのが好きではなかつた。

— 奴らが〈討伐〉に行くのに知らせずに相撲をするなんて—

こう思いながらじれつたがっていると、ポンナム少年が先に自分の仲間の腰をつかんで腰投げをかけてそのまま自分が倒れてしまつた。その光景を見ていたほかの少年が、「わあ、本当に強いな」と驚いたように言うのと、別の少年が、「今度は取りなおしだよ、取りなおし……」と言つてもう一度やれと騒ぎ立てた。

ポンナム少年は〈運〉悪く負けたんだというように自分の仲間を見て、もう一度やろうと迫つた。するとその少年はしりごみしていやだと言いながら、奴らが登つていく方を眺めた。その時ポンナム少年は彼の鼻をこぶしで殴つて逃げ出した。彼の鼻からは赤い血が噴き出した。彼は泣きながら石ころをつかんでポンナム少年の後を追いかけていつた。

ポンナム少年は追いかけられるふりをしながら、学校の裏山に駆け登った。ほかの少年たちは二人の後姿を立って眺めているうちに散らばってしまった。

ポンナム少年は自分を追いかけていた児童団員の仲間が山に登ってきた時彼に言った。

「これは悪かったね、血がたくさん出て……僕は急いで家に行ってくるからね」

するとその児童団員は木の葉をむしって鼻血を拭きながら、「かまわないよ。僕も君の気がよく分かっているから」と答えては、互いに力いっぱい抱き合った。

ポンナム少年はそのまま山を越えてまっすぐ村のほうへ駆け下りた。こうしてまっすぐ走っていけば、〈討伐隊〉の奴らよりも早く村に入ることができた。

組織員たちはポンナム少年が飛んでいってあらかじめ知らせたので、〈討伐隊〉が襲ってくる前に何事もなく皆身を避けることができた。

彼らが身を避けたあといくらも経たずに村に到着した〈討伐隊〉の奴らは、〈かめの中に入ったねずみ〉だと言いながら、すっかり捕まえた気になってうれしかった。しかし結局奴らは無駄骨を折り、ひたすら人民に乱暴を働くうちにへとへとになって帰ってってしまった。この日二人の児童団員は革命組織から敵の行動を探ることについての任務を受けて学校に行っていた。

このように児童団員たちは偵探活動や社会世論の収集、走狗の監視など、困難で危険な革命の任務を立派に遂行した。

また児童団員たちはどんな環境と条件の下でも、さらには自分の二つとない生命を捧げてまでも組織の秘密を守り、児童団員の高貴な栄誉を輝かせ、組織が与えた任務を立派に遂行した。

「秘密は児童団員の生命だ。私は死んでも組織は生きる！」これは幼い革命家たちのスロ―ガンであり、どんな力によっても壊すことのできない彼らの固い信念だった。

児童団員たちは勉強するのにも一生懸命だったが、敵の〈討伐〉から遊撃根拠地を守り抜くための闘争においても非常に立派に闘った。

私が遊撃区域であるウアンウグのサンチョンにいた時のことである。

ある日二人の児童団員が通信を持ってウアンチョンに急いで向かっていた。ところが彼らは広い道の道端で不意に現れた日帝の警察官七人に出くわした。

前にも後ろにも進めなくなった彼らは、とっさにどこかに身を避けることもできなくなった。奴らはいきなり、「どこに行くんだ？ あん……」と言いながら子供たちを殴り、体を探ろうとした。

——どんなことがあっても組織の秘密を必ず守らなければならない。——このように考えた彼らは、警官たちが体を探り始めた時、目で合図をして最後の悲壮な覚悟を決めた。

奴らが通信メモを隠してあるところを探ろうとした瞬間、横に立っていた児童団員は、自分の身に隠し持っていた三号爆弾を取り出して、奴らが囲んで立っているとところへ投げつけ

た。こうして彼らは自分たちの命を捧げて通信の秘密を保障し、敵の四名を即死させ、三名に重傷を負わせた。

一度はこんなこともあった。寒い冬の日だった。

裏山の頂上で歩哨に立っていたカン・リョンナムという児童団員は、歩哨を交代して家に帰ってきた。

家に帰ってきてみると、母親は遊撃隊員たちの服を作りに出かけて、誰もいなかった。ところがこの時児童団支部責任者が訪ねてきた。

リョンナムは彼といっしょに指導員のところへ駆けつけた。そこにはバク・ミョンスクという児童団員も来ていた。指導員の顔が緊張しているところから見て、リョンナムは急なことが提起されたのだと察した。

指導員はリョンナムとミョンスクをかわるがわる見て、ぐるぐる巻いた紙切れを出しながら言った。

「今敵の〈討伐隊〉が遊撃根拠地を攻めてくるが、君たちはまずこのメモを遊撃隊に渡さなくてはならない。これは普通の通信と違って、急も要するが、絶対秘密だ。もしもこのメモが奴らの手に入れば、その時は大変なことになる。だからどんなことがあってもこれだけは敵の手に渡してはならない。」

指導員は持つていく場所と会う合図、そして行く道を一つ一つ教えてやってから念を押した。

「できるね。これが奴らの手に入ってはならない。分かったね？」

「はい」

リョンナムとミヨンスクは力強く答えた。

「それじゃ気をつけて行つてきなさい。」 指導員はリョンナムとミヨンスクの手をぎゅつと握つてやりながら、彼らが無事に帰つてくることだけを願つた。

彼らは敵統治区域を通過するので、赤いネクタイと、奴らが疑いそうなものを取り除いて、出かける準備をした。

支部責任者と分隊員たちは、自分たちがかぶっていた毛糸の帽子とてぬぐいをリョンナムとミヨンスクにかぶせてやつた。

その時ちょうどリョンナムとミヨンスクの母親が家に来ていた。彼らは母親に通信連絡に行つてきますと言つた。リョンナムの母親はじゃがいもをいくつか包んでやりながら、「気をつけて行つてきなさい。そして秘密を必ず守りなさい。」と頼むのだった。

吹雪が吹き荒れていたが、彼らはかまわずに出発した。リョンナムとミヨンスクは今度初めて通信連絡に行くのではなかつた。

彼らはすでに何度も通信を運んだが、ある時には履物の底に入れていたり、またある時にはチヨゴリの襟に隠していったりもした。そして秋にはもろこしの茎の中に入れて行って、敵に道端で出会つたらぱつとそれを地面に落とし、奴らが体を探つて行つてしまつてから再

びそれを拾っていったりもした。

夏にはねぎの中に入れていき、奴らが前に現れればそれをかみながら通りすぎたりもした。しかし敵もしまいには児童団員たちがこのような方法で通信連絡をするというのを知っていたので、奴らをだますのは非常に難しかった。

あれこれ考えながら歩いていたりヨンナムは、通信のメモをミヨンスクのチョゴリの襟の中に入れてのが安心できなくて、ミヨンスクに急にこう訊いた。

「ミヨンスク、おまえ、あの通信をほかのところに隠せないかい？」

「だって……どこに隠すの？」

ミヨンスクもよい考えが浮かばずにリヨンナムに訊き返した。

「ミヨンスク、おまえの頭の中に隠せよ。」

「頭の中に?…」

「うん、おまえのお下げ髪の中にだよ。」

ミヨンスクはチョゴリの襟に隠したメモを髪の毛の中に入れてから手ぬぐいをかぶった。

彼らが高くて険しい山の上に登り立った時、吹雪があまりにも激しく吹き荒れたので、前を見分けることができなかった。リヨンナムが前に立って吹雪をさえぎりながら歩くと、ミヨンスクはその後ろに従った。

このようにして彼らがキルチョンリヨンの入り口のケプンの街に入った時だった。彼らが

進む道の前に馬に乗った敵が向かってきていた。不意に現れた奴らを見たリヨナムとミヨンスクは、びつくりして歩みを止めた。

「奴らも初めはびくつとしたが、幼い子供たちだと知って安心したらしく、あやすような語調でこう訊いた。

「おまえたちはどこへ行くんだい？」

リヨナムがすばやく答えた。

「僕たちは〈ヤクスドン〉に住んでいます。おじさんの家に行つてくるところです。この子は僕の妹です！」

憲兵は気味悪く顔をしかめながら、「それじゃおまえはこの子の兄ちゃんだと言うんだな。ははは！ こいつら俺を誰だと思ってるんだ。俺が分からないと思うのか！」

憲兵は馬に乗ったまま皮の鞭でリヨナムの顔を容赦なく叩いた。

「なんで叩くの。私のお兄ちゃんには何の罪もないわ。」

ミヨンスクは涙を流しながら泣いた。

憲兵は馬から飛び降り、腰に差していた長刀をがちやがちやさせながら、「こいつら、本当のことを言え、おまえたちは児童団員か？ これが見えないか！ 通信連絡に行くのか？」

「通信って何のことか僕たちには何も分かりません。」とリヨナムが泣くような声をあげると、馬に乗っていた隊長が体を調べると怒鳴った。

憲兵たちはリヨンナムとミヨンスクを別々に立たせて、履物から上へ調べ始めた。

リヨンナムとミヨンスクの胸は棒で叩かれるようだった。

（どんな場合でも秘密を守らなければならない。この通信を敵の手に入れさせては絶対にならない。）

彼らの頭の中には、出発する時指導員とお母さんが頼んだ言葉が耳にはつきりと聞こえてくるようだった。

リヨンナムはとっさに思いついて、袋に入れてあったじゃがいもを取り出した。これを見た奴らは、手榴弾かと思つて数歩後ろに下がったが、それがじゃがいもだと分かると、覆いかぶさるようになつて奪つた。

ところが奴らはそのじゃがいもの中に何か秘密でもあるのかと思つてむやみにこねくり回していた。

リヨンナムはミヨンスクのほうばかり見ていた。ところがミヨンスクの足袋まで調べた憲兵は、チヨゴリの襟を調べ始めた。

チヨゴリの襟にしまつておいたら大変なことになるところだつたと思つて、二人は大きく息をついた。

ちようどこの時ミヨンスクのチヨゴリの襟を調べ終えた憲兵は、ミヨンスクがかぶつていた手ぬぐいを取つてお下げ髪をほどこき始めた。

その瞬間ミヨンスクは胸を押さえながら軽い悲鳴を挙げた。

リヨナムはとつさに憲兵に抱きついて倒れた。あまりにも急に飛びかかったので、せいもどうすることもできなかつた。

「ミヨンスク、早く呑み込んでしまえ！ 早く！」 リヨナムはそいつに抱きついて倒れながら叫んだ。

ミヨンスクはリヨナムの言葉を聞いてすばやく髪の毛の中に入れてあつた通信メモを口の中に入れた。

この時ほかの奴が通信メモを呑み込んでしまえないようにミヨンスクの首を締めて放さなかつた。ミヨンスクの顔はたちまち真つ青になつた。実に危急な瞬間だつた。

これを見たリヨナムは、ありつたけの力を振り絞つて一人を殴り倒し、ミヨンスクの首を締めていた奴に飛びかかつた。するとそいつは足でリヨナムを蹴つた。

リヨナムは雪の上に倒れた。するとそいつはミヨンスクの口の中に汚い指を突っ込んだ。この時とつさに気を取り戻したミヨンスクは、そいつの指を思い切りかんだ。そいつは「あつ！」と死にそうな声を挙げながら身をよじつて無理やり指を抜くと、ミヨンスクの首を締めていた手まで放してしまつた。その瞬間ミヨンスクは通信メモをとつさに呑みこんでしまつた。

ほかの奴が秘密のメモを奪おうとさらに飛びかかつたが、すでに時は遅かつた。

ミヨンスクの口の中には何もなかつた。奴らは腹が立つて顔面が真つ赤になつたり真つ青

になつたりした。馬の上からこれを見ていた隊長は、子供たちがどうにも言うことを聞きそ
うにないので、自分の卒兵たちを押しつけて凶悪な笑みを浮かべながら、「おまえたちは児
童団員か？」と訊いた。

リヨナムは最後の瞬間を前にして、もうそのことを隠そうとしなかつた。彼はキム・イ
ルソン將軍の世話の中で新たな生の道を求めて甲斐に満ちた生活をしてきた遊撃根拠地内の
生活の日々を振り返つてみた。そして自分の故郷であるファンヘ（黄海）道ピョンサンの地
でお母さんが病いにふしている時に、自分より年上の兄さんと姉さんが飢え死にした事実や、
そこを離れてチャンゼンを経てトウマン江を越えて異国の地にまで来ても、日帝の搾取と圧
迫を受けながら血の涙を流して生きてきた父と母のことを思い浮かべてみた。

「早く言え。」隊長は再び催促した。

「そうだ、我々は児童団員だ！」

「通信を持つて行くところだったんだな？ それさえ言えば褒美もやるし、家にまで連れ
ていってもやろう。わしは隊長だからうそは言わない。褒美をもらつて家に帰つたらどんな
にいいかな？」

そいつはリヨナムを巧みになだめすかそうとした。

「我々は児童団員だ！ 児童団員はそんなうそにだまされはしない！」

どんなになだめでも言うことをきかないので隊長は腹が立って、返事をするまでこいつら

を殴れと自分の卒兵たちに怒鳴った。

奴らは隊長の言葉が落ちるや否や、リヨナムとミヨンスクを皮の鞭で殴り、靴で蹴りながら拷問を始めた。

ひどい拷問でリヨナムとミヨンスクが気絶すると、奴らは煙草をくわえて彼らが意識を取り戻すのを待った。

しばらくしてぼんやりと気を取り戻したリヨナムは、自分のそばに倒れているミヨンスクの様子を探った。ミヨンスクの頭には血がべつとりと付いていた。リヨナムはミヨンスクの頭に付いた血をやつと袖で拭いてやった。

その時やつと気が付いたミヨンスクは、リヨナムの手をぎゅつと握った。

リヨナムとミヨンスクが意識を取り戻すや、あくどい奴らは彼らを馬の尻尾に結び付けて馬を駆った。リヨナムとミヨンスクは雪の上をずるずるひきずられていった。雪の上には彼らの流した血が赤く染みた。奴らは馬を駆ってキルチョン嶺の頂上まで来ると馬を止めて再び尋問し始めたが、すでにミヨンスクは気を失って何も分からなかった。ただリヨナムだけが奴らの問いに、「知らない！」と答えるだけだった。

しかしリヨナムもいくらも経たずに気絶してしまった。だが彼らは死ななかつた。

隊長は彼らが再び気を取り戻すや、豚ののどをちよん切る時のような声でしゃべった。

「もう最後だぞ。答えるのか、答えないのか？」

リヨナムはぱつと立ち上がって力強く言った。

「僕の名は児童団員カン・リヨナムだ！」

「うん、それで…」

「この子は児童団員バク・ミヨンスクだ！」

「何しに行くところかと訊いてるんだ。」

「おまえたちをやつつけてくれと遊撃隊に連絡に行くところだ！」

「何、遊撃隊！…どこへ？　どこへ行くのかと訊いてるんだ。」

「死んでもそれだけは教えてやれない。児童団員は秘密を命をかけて守ることを赤い旗の前で誓った。そして児童団員は、世の中で最も卑劣なことは犬になって変節してうそをつくことだと考えているんだ！」

腹が立った隊長は、皮手袋をパンパンと叩いて、「銃殺しろ！」と怒鳴った。

リヨナムはミヨンスクを横に抱え、ミヨンスクはリヨナムに寄りかかったまま力強く立ち、寒さと恐怖に震える敵をにらみつけた。彼らの目の前には遊撃隊員である父の顔と母、そして先生と児童団員たちの顔が順々に浮かんだ。

リヨナムは頭をぱつと上げて、キム・イルソン將軍のおられるところを遠く眺めた。

児童団生活をすっかりやり、必ずキム・イルソン將軍の真の戦士になると誓ったこと、組織が与えた任務を間違いないで遂行するために努力してきたことを考えた。そしてまだ一度も

お目にかかったことはなかったが、キム・イルソン将軍が吹雪をかき分けながら自分たちのところへ来られるように感じられ、将軍の懐の中が限りなく恋しかった。

（キム・イルソン将軍さま！ 僕たちは児童団員らしく秘密を守って死にます。お母さん、お父さん、僕たちは将軍様が育ててくださった児童団員らしく秘密を守って敵と勇敢に闘いました。この仇を討ってください！）

リヨナムはこのように心の中で叫びながら、敵に向かって声高く叫んだ。

「この犬どもめ、おまえたちは僕たちを殺すことはできても、朝鮮革命は必ず勝利するんだ。おまえたちは僕たちを殺しても、おまえたちは必ず滅亡するんだ。」

僕たちにはキム・イルソン将軍様がおられる！…」

キム・イルソン将軍という言葉に仰天した奴らは引き金を引いた。

彼らは最後の力を振り絞って万歳を声の限り叫んだ。

「キム・イルソン将軍万歳！」

「朝鮮革命…万…歳！」

リヨナムとミヨンスクは雪の上に倒れた。

このように賢明な二人の児童団員はキム・イルソン将軍が育ててくださった真の児童団員らしく、革命と組織の秘密を自分の命のようにみなし、それを最後まで守り抜いた。

キム・イルソン将軍に対する無限の忠実性と、曇りなく清らかな革命的良心！ 革命の勝

利に対する固い信念と不撓不屈の革命精神！ まさにこれによって彼らは解放された朝鮮の美しい未来を思い描きながら、笑顔で死をためらいなく迎えたのである。

このように児童団員たちは赤い旗の前で立てた自分たちの固い誓いを立派に実践し、革命の激しい暴風雨の中で祖国の優れたつぼみとして赤く赤く咲いた。

その時からいつのまにか数十年の歳月が流れたが、私の目の前にはキム・イルソン同志の懐に抱かれて革命の炎の中で咲いた赤いつぼみたちである児童団員たちの賢明で勇敢な闘争の姿がありありと浮かぶ。

この時の児童団員たちの年から言えば、普通分別がなく、いたずらにばかり熱中する年頃だったが、彼らは昼夜を分かたず、猛獣がうようよしている千古の樹林の中をかき分けて進み、雨風、吹雪、険しい山道をいくつも越えて、革命の任務を命を捧げて遂行したのである。

キム・イルソン同志の温かい懐の中で育った幼い革命家たちの目覚ましい活動と、彼らの血にまみれた闘争は、遊撃根拠地を守るうえで大きな力であったばかりでなく、革命の頼もしい後備隊としての自己の高貴な任務を忠実に遂行した輝かしい闘争の記録であり、朝鮮革命の勝利を早めるための聖なる闘争の一部だった。

実に彼らが發揮した崇高な革命精神は、今日我が国の数百万の子供たちの高く弾む胸の中に脈打っており、彼らを党と首領に対する無限の忠実性と偉勲に導き、消えることのない炎として永遠に生き続け、いつそまばゆく輝くだろう！

今日我が国の幼いつぼみたちは、賢明な児童団員たちのように、キム・イルソン同志の教えに従って共産主義建設の後備隊に、党と首領を命をかけて保衛し、首領の命令指示を無条件最後まで貫徹する近衛隊、決死隊に頼もしく育っている。

(2005年5月3日)